2019 年度修士論文

マインドスポーツのコントラクトブリッジの普及

― 強豪国の普及と強化にみる日本の可能性 ―

Promotion of Contract Bridge as a Mind Sport:

Learning from the World's Expert Nations

早稲田大学　大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻

スポーツクラブマネジメントコース

５０１９Ａ３１６－４

柳澤　彰子

研究指導教員：　間野　義之　教授

目次

第１章　序論 1
　第１節　コントラクトブリッジとは 1
　第２節　マインドスポーツとしてのブリッジと競技団体 1
　第３節　日本のブリッジ事情と問題の所在 2
　　第１項　日本のブリッジ事情 2
　　第２項　世界における日本の競技力 4
　　第３項　問題提起 4
　　第４項　研究の目的 4
第２章　先行研究の検討 5
　第１節　ブリッジ普及にネガティブな側面に関する研究 5
　第２節　ブリッジの効用に関する研究 5
　第３節　フィジカルスポーツにおける普及と強化に関する研究 6
第３章　研究方法 7
　第１節　調査対象国 7
　第２節　調査方法・内容（項目） 8
　第３節　倫理的配慮 9
第４章　結果 10
　第１節　ポーランド 10
　　第１項　調査国背景 10
　　第２項　ブリッジへの国の支援、ブリッジの属性（スポーツとの関係） 10
　　第３項　普及の実態 10
　　第４項　強化について 11
　　第５項　その他（ブリッジにおける多角的側面での研究、検討） 12
　第２節　オランダ 12
　　第１項　調査国背景 12
　　第２項　ブリッジへの国の支援、ブリッジの属性（スポーツとの関係） 12
　　第３項　普及の実態 12
　　第４項　強化 13
　第３節　イングランド 13
　　第１項　調査国背景 13
　　第２項　ブリッジへの国の支援、ブリッジの属性（スポーツとの関係） 14
　　第３項　普及の実態 14
　　第４項　強化について 15
　第４節　中国 15
　　第１項　調査国の背景 15
　　第２項　ブリッジへの国の支援、スポーツとの関係 15

第３項　ブリッジの普及 16
第４項　強化について 16
第５節　日本*6 16
第１項　ブリッジへの国の支援、ブリッジの属性（スポーツとの関係） 16
第２項　普及の実態 17
第３項　強化について 17
第５章　考察 19
第１節　普及の対象 19
第２節　普及と統合した強化 20
第３節　政府機関の支援、ブリッジの属性について 21
第６章　結論 22
第７章　引用文献 23

巻末資料

1　世界ブリッジ連合傘下の競技団体(NBO)への簡易調査（2019 年 11 月実施）
2　ブリッジプレーヤーの実態調査アンケート用紙（SurveyMonkey のハードコピー）

第１章　序論

第１節　コントラクトブリッジとは

コントラクトブリッジ（以下、ブリッジ）はトランプを使って行うカードゲームである。16 世紀に英国で考案された「ホイスト」を原型とし、1925 年アメリカの鉄道王ハロルド・バンダ―ビルドによって現在の「コントラクトブリッジ」が完成されたと言われる。基本は 2 対 2 のダブルスで行うトリックテイキングゲームで、国際共通ルールが確立しているため世界中でプレイすることができる。（JCBL、HP） 家庭や社交で気軽に楽しむ社交（ソーシャル）ブリッジと、試合形式で成績を競う競技（デュープリケート）ブリッジがある。　海外のブリッジ研究者たちは後者をシリアスブリッジ(Scott, 1991)と表現しているが、実際のところブリッジの競技会会場でのプレーヤーの表情は非常にシリアスに見える。世界ブリッジ連合 World Bridge Federation（以下 WBF)によれば、この「最高のカードゲーム」(Brkljacic et al, 2017)の愛好家は世界で数千万人におよび、古くから各界の著名人がそれに名を連ねる。中でも現在最も熱心な 2 名の著名愛好家の以下の言葉がこのゲームの特徴を表している。（WBF、HP）

“It’s a game you can play at any age.　If you take it up young, you have fun doing in the rest of your life.　A lot of games don’t have the depth.” – Bill Gates
「年齢に関係なくプレイできるゲームである。若くして始めれば、長く（一生）ゲームを楽しむことができる。他の多くのゲームにこれほどの深さはない。」[*1]―ビル・ゲイツ

“Bridge teaches you logic, reasoning, quick thinking, patience, concentration and partnership skills.” – Martina Navratilova
「ブリッジから、論理的思考、推理力、素早い判断力、忍耐力、集中力、パートナーシップのスキルなど沢山のことを学ぶことができる。」[*1]　マルチナ・ナブラチロワ

第２節　マインドスポーツとしてのブリッジと競技団体

世界 8 つの地域の組織(Zonal Conference)とそれに属する各国、地域の競技団体（National Bridge Organization, 以下 NBO）の中心機関として 1958 年に設立された国際競技団体が前述の WBF である。脳の肉体的能力を使う「マインドスポーツ」としてのコントラクトブリッジを普及すること、また世界選手権など最高レベルの競技大会を開催し、必要な規則と規定を整備すること、人種・文化・宗教が異なる民族間の相互理解を深めることを目的としている。(JCBL、HP)　IOC 認定の国際競技連盟(International Federation, IF)、その連合体である IOC 認定スポーツ組織連盟(Association of IOC Recognized International Sport Federation, ARISF)、さらには国際スポーツ競技連盟連合(General Federation of International Sports Federation, GAISF)に加盟しているほか、チェスや囲碁など他のマインドスポーツ団体とと

--

[*1]筆者翻訳

もに、国際マインドスポーツ協会(International Mind Sports Association, IMSA)を設立し、その中心的役割を果たしている。IF 登録後に、ブリッジはオリンピック正式種目入りを目指したが、2002 年ソルトレイクシティ冬季五輪でデモンストレーション参加をした後に断念している。一方で、IOC 下部組織であるアジア・オリンピック評議会(Olympic Council of Asia, OCA)が主催するアジア競技大会においては、2018 年インドネシア大会でブリッジが正式種目に取り入れられた。ブリッジが盛んな旧英連邦が開催するコモンウェルスゲームズでは、正式種目には入れないため、同じ周期で同じ開催国、参加対象国で別途ブリッジの大会を開催している。

第 3 節　日本のブリッジ事情と問題の所在

第 1 項　　日本のブリッジ事情

WBF 登録の NBO である公益社団法人日本コントラクトブリッジ連盟(JCBL)は、日本で唯一のコントラクトブリッジの競技団体であり、その目的を「マインドスポーツとしてのコントラクトブリッジの普及、技量の向上および発展を図ると共に、コントラクトブリッジによる交流を行い、もって文化の振興、青少年の健全な育成、国民の豊かな人間性の涵養および国際相互理解の促進に寄与すること」とする。(JCBL 定款)　現在、議決権のある会員ならびに会友（以下、会員)は 2019 年 7 月現在、7,286 名（登録クラブ数 97、平均年齢約 72 歳）である。過去 7 年の JCBL のデータによれば、毎年平均 250 人の新規入会者（平均年齢 62.5 歳）がいるが、2014 年の 7,800 名をピークに会員数の減少が続いている。会員（年会費要）の主目的は、通常会員のみが参加可能な国内競技会へのアクセスと、入賞者に与えられる段位につながる JCBL 発行のポイントの取得、また会報誌の受領である。最もコアなブリッジ競技者が JCBL 会員（登録者）であるが、これに、非会員でも気軽に参加できる数多くのデュープリケートゲーム(主要ブリッジクラブの場合、平日毎日開催) への参加者を含めた人数が「競技人口」となる。さらには、競技とは別に、順位付けのないゲームを楽しむサロンや、様々なテーマで行われるブリッジレッスン、教室のためにブリッジクラブに通う人、そしてクローズドで家庭やソーシャルクラブ（アジア夫人友好会、東京倶楽部、客船「飛鳥」の船内など）で行われている社交ブリッジを参加の中心にするプレーヤー、ならびに休止中のブリッジ経験者を含めた総数が「実施人口」となる。JCBL は日本のブリッジ人口を推定で 20 万人としている。

図 1　登録人口、競技人口、実施人口の関係（笹川スポーツ財団中央競技団体現況調査を参考に筆者作成）

本研究に取り組むにあたり、事前調査として JCBL ならびに国内 6 つの常設ブリッジクラブの協力を得てアンケート形式の「ブリッジプレーヤーの実態調査」を行った。回答結果の一部は表 1 の通りである。回答者からみられた大きな特徴は、実施人口が圧倒的に首都圏に集中していること（JCBL 会員分布と同様)、後期を含む高齢者が多いこと、そして継続年数

が長いことである。継続 25 年以上のプレーヤーでは、男性の場合は大学時代、また就職先のクラブや余暇活動が、また女性の場合は配偶者の海外駐在先の余暇活動が導入口となっているケースが多い。1970 年代半ばから約 30 年に形成されたグループが現在の競技人口の中心的存在の 50 代～80 代のプレーヤーである。しかし、失われた 20 年で、経済状況や会社組織における人間関係の変化などにより、企業内でのブリッジクラブ、余暇活動も削減され、企業対抗のブリッジ競技会と参加者も激減した。また、駐在夫人の数の減少、また彼女たちの現地でのライフスタイルや配偶者のヒエアルキーを引きずった人間関係などにも変化が起こったため、海外にあった日本人のブリッジ会が縮小或いは消滅していることが海外在住ブリッジプレーヤーなどへの聞き取りからも判明した。競技団体である JCBL が努力をしなくても参加人口が増加できた状況（ビジネスモデル）でなくなった今、日本のブリッジ界は大きな転換期を迎えている。「普及」について真剣な見直し、検討が必要と思われる中、回答者の多くから、NBO の取り組み方(姿勢)やブリッジの認知度のなさが普及に対する最大の問題点と指摘された。

表１　ブリッジプレーヤーの実態調査

実施	2019.07.01-31	
方法	インターネット調査	（JCBL HPリンク設定）/アンケート用紙調査（都内4・都外２のブリッジクラブ）
回答	322 内　有効回答数	235　　JCBL会員　210名　非会員25名（内6名は前会員）
属性	JCBL会員	会員210名　非会員　25名(内6名は前会員）
	性別	男性　115　　女性 120
	年齢	平均年齢　60.2歳 (男性58.6歳　女性61.7歳）
	居住地	首都圏集中19都道府県 (東京, 神奈川、千葉、埼玉の順でJCBL会員分布とほぼ同様）
	最終学歴	高学歴　大学　64.26%　大学院卒 11.49%　短大・高専卒 11.49
	世帯収入	1,000万以上　29%　600-1,000未満　17.02%　400-600未満　14.04%
参加年数	開始年齢	10代～70代（10代～22歳と70歳以上は殆ど男性。23歳～59歳までは女性が大半）
	継続年数	10年未満は男女差なし。11年～40年は女性。41年以上は殆ど男性。
導入関連	開始理由	友人・知人のすすめ　53%　個人的興味　32.5%
	開始方法	体験・入門講座 36%　駐在先の余暇活動 20%　ブリッジ関連の本(独学）20%　クラブ活動　18%　職場　11%
参加慣習	ブリッジ関連支出(月）	1万円未満 36%，1～2万円未 22%、2～3万未満 21%、3～5万未満 14.5%、5万以上6.5%
	平日クラブ参加(月）	月4回以下 45.8%、5～8回以下 29%、9～12回以下15.5%、13回以上　9.7%
	週末競技会参加(月）	月2日以下 43%、月4日以下30%、月6日以下 16%、月8日以下 9%、それ以上 2%
	レギュラーパートナー	いる 83%　いない 17%
	パートナーの人数	2～5人 61%　6～10人 24.5%　1人11.7%　11～15人 2.6%
	ネットブリッジ経験	経験　63.4%　未経験　36.6% (80歳以上を除いて世代間差なし）
	ネットブリッジの影響	対面式ブリッジへの参加回数等の影響なし　94%　対面式参加回数が増えた　6%
	好きなところ	ゲームの面白さ 84.5%　難解さや能力への挑戦 50.7%　社交性・交友関係 45.6%　成功・失敗を共有 42.4%　努力が結果に出るところ　18.8%　競争性 18.3%　自分の居場所を感じる　15.2%　グレード感 4.5%　JCBL発行ポイントの取得　3.6%　　複数回答形式
	嫌いなところ	上達が難しい 30.4% 失敗の憂鬱感 28% パートナーとの人間関係 26.2%　パートナー・チームメイト探し 25.7%　対戦相手やクラブの雰囲気 19.7%　運動不足 16.8% 日程調整 15.4% 自分一人の力で成績が決まらない　14.5%　夢中になってほかのことができない　8.9%　　複数回答形式
普及関連	人にすすめたい？	Yes 76.5%　No 12%
	誰にすすめたい？	友人・知人・同僚 79.7%　配偶者 12% 子供(大学生以上）11.5% 孫 (18歳未満）6.6%　複数回答形式
	すすめない理由	難易さ(難しい・時間がかかる）71.5% 人間関係 36%　適性があるから　18%　複数回答式
	普及活動している	Yes 30%　No 70%
	普及の弊害	JCBLの取り組み姿勢・システム 72%　知名度のなさ 60%　ゲーム・習得の難しさ 33%　人に関わる問題 27%　イメージ 8%　お金がかかる7%
	普及の対象設定	中高生 44%　大学生 43% 退職者 36% 社会人31% 専業主婦 21% 小学生 21%　複数回答形式
健康関連	認知症・ボケ防止	なっていると思う 67%、関係ない 3%、わからない 27.7%
	ウェルビーイング	ブリッジのお蔭で実感している 74%、関係ない 7%
	クラブ通い何歳まで？	身体の続く限り 59%、70代までは 18%、80代までは 16%　→フィジカルスポーツより継続可能年数長い
その他	JCBLプロ制度必要？	認定プロ制度・指導員制度双方必要 25%　指導員制度のみ必要 14.5%　どちらも不要 13.7%　認定プロ制度のみ必要 6%

第２項　　世界における日本の競技力

JCBL が日本代表チームを派遣する主要国際試合は、WBF が主催する世界大会とその第６ゾーンの Asia Pacific Bridge Federation（APBF)が主催のリジョナルの国際大会である。国内の代表選抜大会を経て*[2]派遣された日本チームの戦績は、リジョナルでは優勝を含むメダル獲得が各カテゴリー*[3]で数回あるが、1950 年の JCBL 前身の東京ブリッジ協会設立以来、世界大会で表彰台にあがったのは２回、全カテゴリーを通してベスト８に進出したのも６回で、日本はブリッジ強豪国との認識はされていない。また国内メディア等の注目を集めるに至ってもいない。

表２　日本の世界大会での上位成績（1972 年の初参加から）

1991	世界ブリッジチーム選手権	ウィメン	ベスト８
1995	世界ブリッジチーム選手権	ウィメン	ベスト８
2000	第11回ブリッジオリンピアード	ウィメン	ベスト８
2004	第12回ブリッジオリンピアード	オープン	ベスト８
2008	第1回マインドスポーツゲームズ	シニア	優勝
2017	世界ブリッジチーム選手権	シニア	ベスト８
2017	第5回ワールドユースオープン	ユース	準優勝
2019	世界ブリッジチーム選手権	ウィメン	ベスト８

第３項　　問題提起

競技人口の中心となる会員の減少が 2015 年から続く中、JCBL の事業報告書を見る限り、普及に関しては数少ない試みは見られるものの、包括的な戦略、また効果的な具体策は見受けられない。また、競技力については、世界大会、またその出場権を獲得するための第 6 ゾーンのリジョナル大会においても際立った成績は限られており、その改善、結果を出すための積極的な対策はとられていない。2018 年アジア競技大会でのブリッジの正式種目入りは、ブリッジの認知度の低い日本にとって、ブリッジというゲームの絶交のＰＲの機会であったが、日本選手団最高齢、またパートナーとの 46 歳という年齢差に注目が集まり、ブリッジのゲーム自体の十分な伝達には至らなかった。（それでも、直後の体験教室に普段より若干多い参加者があったことはメディア効果であった。）JCBL が掲げる普及、技量の向上・発展というミッションはどのように実現できるのだろうか。

第４項　　研究の目的

本研究は、海外における競技団体を中心とした普及、強化のシステムを明らかにし、そのベストプラクティスや問題点から、日本における今後の主にブリッジ普及、そして強化の指標を探ることを目的とする。

---

*[2]選抜試合参加が複数なく不戦勝で代表となる場合もある

*[3]チーム戦のカテゴリーは通常、「オープン」が年齢性別の制限なし、「ウィメンズ」は女性だけのメンバー構成。「シニア」は現在 61 歳以上の性別制限なしのチーム構成（65 歳に到達するまで 2 年に 1 歳ずつ最低年齢があがる）

第２章　先行研究の検討

第１節　ブリッジ普及にネガティブな側面に関する研究

Scott（1991）は、アメリカにおけるブリッジ人口の激減（1957～86 年の 30 年間に 3,200 万人から 1,100 万人に減少）と高齢化の要因を、レジャーの多様化と「年寄りのゲーム」という偏見による若者離れとし、若年層の減少による実施人口の継続的な減少を警鐘した。Caesar(2006)も、英国の若者にはブリッジは古臭いというイメージがあり、その認識を変えることが必要であると述べている。また、パートナーシップ、チームワークを要するゲームの特徴として、対人関係の中で起こりうる問題、例えばスケジュール調整の手間(Scott, 1991)、能力差からくる様々なわだかまり、忍耐や緊張感，そしてブリッジプレーヤーは自分より下手な人とは組みたがらないという傾向（Punch et al, in press）も継続を難しくする要因として挙げている。さらに、習得が非常に難しく（Brkljacic et al, 2017)、基礎を理解するために要する時間や集中力が、ブリッジ体験、入門の早い段階で多くの脱落者を出す要因となり、ブリッジの普及のハードルとなっているとされている（Judge et al, 2019)。

Godbey et al (1992)は米国における社交ブリッジと競技ブリッジへの参加について、既存のメンバーの招待が必要な前者の閉鎖性（入口の困難さ）を指摘しているが、事前に決めたペアやチームで参加しなければならない競技ブリッジと違い、一旦メンバーとして認められれば、一人での参加も可能という気軽さもあるとする。西欧ほどの社交的なクラブ社会が存在しない日本においても「クローズドクラブ」として JCBL に登録しているものでも 20 以上ある。社交ブリッジは、間口は狭いが、同じ社会的属性の集まりという安心感と結果へのこだわりが少ない穏やかな環境が特徴といえる。

第２節　ブリッジの効用に関する研究

Brkljacic et al (2017)は、社会や人との繋がり(social relationship and affiliation)が、ウェルビーイングに（Jang et al, 2004)、また寿命内での良好な健康維持に非常に有効ということ（Cohen, 2004）が、高齢のブリッジプレーヤーに該当することを調査で明らかにしている。その理由は、ブリッジが「シリアスな余暇（serious leisure)」がもたらす大きく分けて３つの効用、達成感（sense of accomplishment)、健康維持(health and fitness)、社会とのつながり(social affiliation)(Major 2001)を実現させるためと論じている。

Steffens NK et al (2016) は縦断研究から社会グループ参加が退職後の早死危険(mortality risk)防止に効果がある(逆に属性を失うと危険率が高くなる)ということを数値で示した。また長ヶ原ら（1992）は、退職後の余暇活動は、健康と生活の質の維持・向上、医療費負担の軽減など社会にとって有益で、高齢者の運動・スポーツの普及が国内外の重要な政策にもなっていると論じている。さらに、水野（2012）は会社への帰属意識が強かった定年退職した高齢者（団塊世代含む）が趣味や考え方を同じくする同好者でグループを形成し、交流を深めていくことを「クラブ型余暇社会」の形成と論じている。日本のブリッジクラブの昼間の光景は、まさにこのクラブ型余暇社会の典型的なプラットフォームに映る。

一般的にゲームや音楽など余暇活動に参加している高齢者の方が認知症の発症率が低い（Verghese et al, 2003）との研究があるが、Clarkson-Smith et al（1990）は、高齢（55～91 歳）のブリッジプレーヤーと非プレーヤーの能力調査で、ブリッジが記憶力や論理的思考、推理力には効果があることを示した。因みに、言語能力などその他の能力には特段の効果はないとの見解も付記されている。 Shaw（2007）は、同様の縦断研究を小学生で行い、算数の授業にブリッジを取り入れたグループの統一テストの成績が 2 年目から他のグループよりも全教科で上回ったことを発表した。

第 3 節　フィジカルスポーツにおける普及と強化に関する研究

フィジカルスポーツでは、Mass Participation（普及） と High Performance（強化）の一体的な進展について、同じモデル（Smolianov & Zakus 2009）を用いた研究が複数ある。Hanstad et al（2010）は、上達のためのプログラム、サポート体制が整っていれば、実施人口の拡大はエリートスポーツの土台となるため、普及と強化の相乗効果を求めた取り組みが世界的に広まっていると述べている。その一例が、子供時代からの実施の重要性であり、アメリカのラグビーが実施人口ではほぼ同数のオーストラリアに競技力で大きく差をつけられている一大要因は、子供の実施人口が 1/10 ということと論じている。若くしての参加者数が多ければ、上達の可能性に加え、加齢の段階での中止、撤退の参加人口減少への影響の最小化や、後の再開(参加)の可能性に期待できる（Carney, M. et al 2012）。また、エリートだけでなく、特に子供を含む若年層の取り込み、上達、強化に対する支援、資金の有効な配分や可能な対策（政府などからの資金援助や減免措置への取り組みなど）が重要ともある（Smolianov, P. et al. 2014）。さらに、 Sotiriadou et al（2009）は、 選手強化の成功には、それを可能にする財政と競技自体の高い認知度（プロフィール）、そしてその競技、スポーツに関心を高める道筋が必要と述べている。

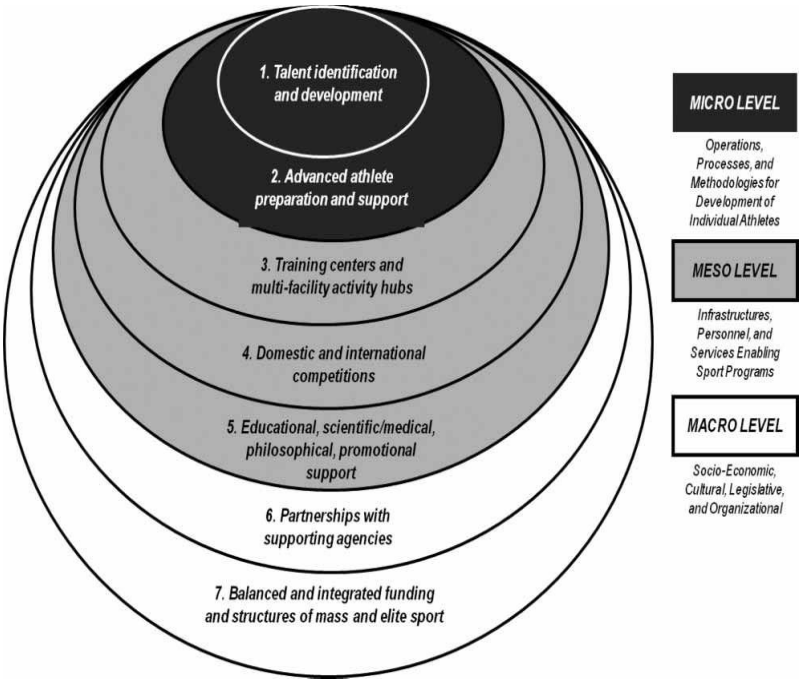

図 2　Smolianov & Zakus 2009 モデル

第3章　研究方法

第1節　調査対象国

ブリッジ普及策に関する資料、先行研究がない中で、100を超えるWBF傘下の国/地域からの調査対象国の選定に辺り、日本が学べる可能性を示唆する客観的指標・データは世界大会での全カテゴリーに亘るバランスの良い成績であった。そこで、世界大会（チーム戦）の全てのカテゴリーで好成績を出しているポーランド、オランダ、イングランド[*4]の欧州3か国と、日本が属する第6ゾーンの覇者の中国を調査対象とした。尚、ポーランドと中国については、先行研究論文の筆者でもあるスコットランドStirling大学のSamantha Punch教授との面談(2019年9月世界チーム選手権開催中)で研究対象国としての支持を確認した。

表3 過去10回(2001-19)の世界チーム選手権の成績（決勝ラウンド進出国と最終結果）

Bermuda Bowl (Open)	1	2	3	4	5	6	7	8	金	銀	銅
44th (2019)	USA	**CHN**	SWE	NOR	**NLD**	***POL***	**ENG**	ITA	***POL***	**NLD**	NOR
43rd (2017)	FRA	**NLD**	USA	SWE	USA	BGR	**CHN**	NZL	USA	FRA	BGR
42nd (2015)	BGR	**CHN**	***POL***	**ENG**	FRA	USA	USA	SWE	***POL***	SWE	USA
41st (2013)	USA	ITA	MCO	***POL***	**NLD**	**ENG**	**CHN**	CAN	ITA	MCO	***POL***
40th (2011)	ITA	**NLD**	USA	ISR	USA	SWE	**CHN**	ISL	**NLD**	USA	ITA
39th (2009)	ITA	NOR	BGR	USA	**NLD**	DEU	RUS	**CHN**	USA	ITA	BGR
38th (2007)	ITA	USA	**NLD**	NOR	AUS	SWE	**CHN**	ZAF	NOR	USA	**NLD**
37th (2005)	ITA	USA	USA	SWE	IND	ARG	EGY	BRA	ITA	USA	USA
36th (2003)	ITA	USA	***POL***	NOR	TWN	AUS	BGR	USA	USA	ITA	USA
35th (2001)	*NOR/**POL***		USA	USA	ITA	FRA	IND	IDN	USA	NOR	***POL***
Venice Cup (Women)	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**金**	**銀**	**銅**
44th	**CHN**	***POL***	NOR	USA	**ENG**	JPN	SWE	**NLD**	SWE	**CHN**	**ENG**
43rd	SWE	**CHN**	RUS	IDN	ISR	**ENG**	**NLD**	***POL***	**CHN**	**ENG**	SWE
42nd	DEN	USA	USA	ITA	**ENG**	**CHN**	**NLD**	FRA	FRA	USA	**ENG**
41st	**NLD**	USA	***POL***	**CHN**	USA	TUR	FRA	**ENG**	USA	**ENG**	**NLD**
40th	USA	USA	**ENG**	**CHN**	SWE	IDN	**NLD**	FRA	FRA	IDN	**NLD**
39th	**CHN**	FRA	USA	USA	ITA	DEU	SPA	SWE	**CHN**	USA	FRA
38th	USA	DEU	**CHN**	USA	FRA	EGY	CAN	**ENG**	USA	DEU	**CHN**
37th	FRA	**CHN**	DEU	USA	USA	IDN	**NLD**	CAN	FRA	DEU	**NLD**
36th	**CHN**	USA	USA	**NLD**	DEU	TAI	CAN	SWE	USA	**CHN**	**NLD**
35th	FRA	USA	**CHN**	**ENG**	DEU	AUS	ZAF	USA	DEU	FRA	USA

表4 世界ユース選手権　過去5回の上位成績

	Juniors (26歳未満)				Youngsters (21歳未満)				Girls (26歳未満・女子)			
順位	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
17th (2018)	SWE	SGP	**NLD**	***POL***	SWE	ISR	FRA	ITA	**CHN**	***POL***	FRA	**NLD**
16th (2016)	***POL***	**CHN**	SWE	**NLD**	ITA	**NLD**	HK	DEU	NLD	AUS	NOR	IDN
15th (2014)	NOR	**NLD**	***POL***	FRA	SWE	USA	NOR	FRA	FRA	**CHN**	ITA	**NLD**
14th (2012)	**NLD**	ISR	**CHN**	AUS	***POL***	USA	FRA	ISR	***POL***	**NLD**	ITA	FRA
13th (2010)	ISR	FRA	**CHN**	USA	***POL***	**ENG**	**NLD**	ISR	***POL***	FRA	**CHN**	USA

[*4]英国には最大規模のEngland Bridge Unionの他に、WalesとScotlandの2つのNBOが存在する。

第２節　調査方法・内容（項目）

対象国の WBF 登録のブリッジ競技団体(National Bridge Organization, NBO)の役員（又は役員経験者）に、事例研究のための「普及」と「強化」の取り組みに関する半構造化インタビュー（Email が中心、一部面談）をそれぞれ複数回行った。 中国については、Chinese Contract Bridge Association（CCBA)の対応が不可であったため、中国リーグ参加の現役国際プロと、中国育成プログラムならびにナショナルチーム代表経験者（世界ユースブリッジ選手権ガールズ部門優勝）へのインタビューとなった。また、同様の内容について JCBL の聞き取りも行った。

表５　調査対象国インタビュー主要回答者

国名	回答者
ポーランド	Dr Marek Malysa, Vice President, Polish Bridge Union/Chairman of Bridge & Science Committee, World Bridge Federation
オランダ	①　Mr Hans Kelder, Technical Director, TopBridge, Neterlands Bridge Bond ②　Ms Marie-José, Neterlands Bridge Bond
イングランド	①　Mr Gordon Rainsford, Chief Executive, English Bridge Union ②　Mr Terry Collier, Managing Director, iDealer Ltd/former Chief Executive of EBU and Director of National Sports Centre
中国	①　陳大偉氏　在日国際ブリッジプロ(中国リーグプレーヤー) ②　王婉女史　元中国代表チーム選手（世界ユース選手権ガールズ部門優勝経験者）
日本	高野英樹氏　日本コントラクトブリッジ連盟事務局長

本研究における 「普及」は第１章で述べた「実施人口」の拡大のための活動を、また「強化」は国際大会における競争力向上のための取り組みとする。

インタビューは、基本オープンクエスチョンであるが、Smolianov & Zakus モデル 2009（図2）のフィジカルスポーツにおける７項目に独自の 2 項目を加えた 9 項目についての情報を回答から得られるように試みた。但し、フィジカルスポーツとマインドスポーツのブリッジとでは相違点（例えば、ブリッジは道具や会場・設備が基本トランプと机と椅子という手軽さや、競技年齢の幅の広さなど）が多く、7 項目の解釈は一部修正を加えた。

１．普及活動と強化の対象の明確化、正当性（ターゲティング、セグメンテーション）
２．ナショナルチーム代表レベル、また予備軍となりうる優秀なプレーヤーのための強化等のサポート
３．普及・強化のための施設（プラットフォーム）
４．競争システム（国内外の競技大会の頻度、アクセス度）－競技の面白さを体験でき、スキルアップの場ともなる競技会の充実度、(参加)アクセスの良さ
５．ブリッジに対する多角的な側面（教育、科学・医学、社会福祉など）の研究や検討
６．公的支援の有無とパートナーシップの充実度
７．普及と強化のための、バランスのとれた総合的な資金調達と組織構造

＜独自追加項目＞

８．PR 活動（競技の認知度アップほかのため）

９．ブリッジの属性（マインドスポーツ、スポーツ、カードゲーム）

第 3 節　倫理的配慮

インタビューから得た回答ならびに本人の詳細公表については、論文に使用することを伝え、了承確認をしている。また、基礎調査に用いたアンケートにおいても、冒頭に趣旨説明を加え、無記名・記名選択方式にて実施した。

第4章　結果

第1節　ポーランド

第1項　　調査国背景

人口3,839万人（2019年6月現在、外務省HP)。NBOであるPolish Bridge Union（以下PBU）への登録者は11,000人。ポーランドのブリッジプレーヤー全体（PBU推定）の5%である。全会員の25%以上が26歳以下のジュニアメンバーということが特徴で、世界的なプレーヤーの高齢化の中で稀有な状況である。また、ポーランドにおけるブリッジの認知度（PBU調べ）は20%超と、正確なデータを持ち合わせる国は殆どないが、高い水準にあると予想される。ポーランドでは、第二次世界大戦前からブリッジは一般的なカードゲームであったが、1944年からスターリン時代が終わる1953年までは隠れたカードゲームとなった。PBUは1956年に設立されているが、本格的にブリッジが競技として成長を始めるのは1970年代以降であった。

第2項　　ブリッジへの国の支援、ブリッジの属性（スポーツとの関係）

ブリッジの属性を「スポーツ」としたMinistry of Sportsが1970年代からスポーツに対する助成金を支給している。また、国のスポーツ振興・競技力向上をミッションの一部とするポーランドオリンピック委員会（Polish Olympic Committee）の会員(Regular Member)でもある。但し、フィジカルスポーツに限定されたポーランドスポーツ協会(Polish Sports Associations)には属していない。加えて、健康、社会福祉の観点からPBUにはMinistry of Social Careからも後述の通り、毎年予算が配分されている。

第3項　　普及の実態

ポーランドでは、子供から高齢者まで全ての世代を普及の対象とし、各セグメントに合わせたプロジェクトが下記の通り立案、実行されている。　普及活動を担う中心は、全国に400名以上いるPBU公認のブリッジインストラクターである。地域自治体、学校等との連携が強く、またSNSやメディアを活用したマーケティング活動も積極的に行われている。

(1) スクールプロジェクト： 10歳以上の小中学生を対象に、全国70の学校で課外授業としてブリッジにふれ、親しむ普及プログラムである。対象の学校選択は、その学校の正規教員にブリッジプレーヤーがいることとされている。Ministry of Sports から年間€25,000が支給され、主にカード（トランプ）などの道具と指導教師のための費用の一部に使われている。

(2) 大学でのブリッジ普及：　ポーランド国内の20の大学で履修科目としてブリッジが取り上げられ、青年に対するブリッジ普及の機会となっている。また習得過程の早い段階から、競技（競争すること）の楽しさを体験できる試合形式のプログラムも用意し、学生のブリッジ継続への意欲を高めるよう導いている。

(3) BRIDGE2SUCCESS (2019-): 最もブリッジの実施、普及では勧誘・定着が難しいといわれる社会人（26歳〜55歳）を対象とした2019年の新規プロジェクトで、従業員の余暇活動として率先してブリッジを推奨するよう PBU が企業に呼びか

けている。職場での習得、プレイ時間に限界があるため、Funbridge（ブリッジ専門のインターネットサイト）との共同イベントなども行い、門戸を広く、また継続しやすい環境を用意している。2019 年 11 月現在では、本プロジェクトを受け入れた企業はまだない。しかし、PBU は職業別のブリッジ大会（例：医療関係者、IT 企業、教育関連など、同業種での大会）を開催し、ゲームとネットワーキング（交流）の機会という組み合わせで、ブリッジから離れがちな社会人とブリッジの距離を縮める努力をして少しずつ成果を出している。

(4) Bridge60+：2014 年 10 月に立ち上げられたプロジェクト。名前の数字が示すように、当初は 60 歳以上の高齢者のメンタルヘルスや社会からの隔離防止を焦点にあてた活動としてスタートした。ポーランドの高齢者の多くは、少ない年金(例：元大学教職者の年金月€500 から平均家賃€250 を引いた自由に使えるお金は僅かになる)で余暇活動の参加率が低く、家への引きこもりや孤独死が社会問題とされている。その解決の一助として、Ministry of Social Care がスポンサー（毎年€25,000-35,000 資金援助）となり、福祉目的を兼ねた無料で参加できるブリッジの普及活動を支援している。プロジェクト用に特別に作成された、わかりやすい（難しくない）無償配布の共通テキストを用いたブリッジクラブ(教室)が、スタートから 5 年の間に、全国で約 300 新設され、7,000 人が新規ブリッジプレーヤーとして加わった。本格的な競技会参加のために PBU の会員登録をしたのはその 1 割であるが、実施人口の大幅な増加につながっている。この活動主旨は他のヨーロッパ諸国にも賛同され、現在 23 の国が同様の活動を実施或いは計画している。

(5) U3A(University of the Third Age)： リタイア後の学びの中心的な場である国内に約 500 ある U3A のうち、約 70 か所でブリッジが履修科目として採用されている。こちらは他の講座と同様に有料であるが、新たな学びを求めるシニア世代をブリッジに誘導する有効な機会となっている。

(6) マーケティング：ポーランドのブリッジ普及成功の鍵の 1 つは、ブリッジ熱狂者たちによるネットワークやメディア、SNS を駆使したマーケティング・PR 活動、そして国際大会での実績である。2019 年の世界ブリッジチーム選手権でのオープンチームの優勝、ヨーロッパ選手権でのウィメンズチームの優勝は大統領官邸での祝賀セレモニー（11 月）に繋がり、メディアで大々的に取り上げられた。また政治家の中にもブリッジプレーヤーが多く、彼らもブリッジの PR に積極的に関わっている。

第 4 項　　強化について

若年層から高齢者まで広範な普及活動で参加者全体を増やすことによって、国内での活発な競技会運営が可能となり、多くの競技プレーヤーのスキルアップの場になっている。

平日、週末問わず行われる国内の競技会の多くでは、優勝者・チームなどに賞品として現金が出る（PBU は推奨していない）ため、プレーヤーの中には、それを継続、スキルアップのモチベーションにしているケースもある。代表レベルのトッププレーヤーの強化は、ユース

とウィメンズチームにコーチがつき、候補プレーヤーから代表に選抜されたメンバーが PBU の手配のもと強化練習が実施されてきた。オープンチームに名を連ねるトッププレーヤーにはプロも多く、海外のスポンサーチームのメンバーとして各国の大きな大会に出場することによって、収入を得るだけでなく更に腕を磨く機会にしている。そのため PBU の強化対象から外れていた。しかしポーランドナショナルチーム全体の世界大会をはじめとする主要試合での活躍が注目される中、2020 年から PBU がすべてのカテゴリーに対し、コーチやトレーナーの費用を負担して、更なる選手強化へのサポートを充実させていくことを決定した。

第 5 項　　その他（ブリッジにおける多角的側面での研究、検討）

Bridge to the People 財団や Nicolaus Copernicus 大学などを中心に、 Ministry of Social Care とともに認知症やアルツハイマー等へのブリッジの効用を科学的に研究し、福祉事業との連携強化を目指している。

第 2 節　オランダ

第 1 項　　調査国背景

人口 1,738 万人（2019 年 9 月現在）。NBO である Netherlands Bridge Bond（以下 NBB）の登録者は約 118,000 人で全国に 1,150 の登録ブリッジクラブがある。日常的にブリッジをしている人口は約 35 万人。平均年齢は 70 歳以上と高い。全国で 650 人のブリッジ教師が実働し、そのうちの 350 名が NBB の正式認定を受けた教師である。また、インターネットのブリッジ専用ゲームサイトを利用しているプレーヤーは 2017 年調べで 2 万人だが、ここ 2 年間でその数が倍以上に膨らんだと推測している。NBB の正規職員は 20 名で組織内に普及、強化の専任の部署が設置されている。

第 2 項　　ブリッジへの国の支援、ブリッジの属性（スポーツとの関係）

Ministry of Public Health, Wellbeing and Sports から予算配賦を受けているオランダオリンピック委員会（Dutch Olympic Committee）がスポーツ/マインドスポーツとして資金援助等をしている。また同省では、「スポーツと身体活動に関する行動計画（National Action Plan on Sport and Physical Activity）」を 2000 年代に立ち上げ、あまり活動的でない人にプレッシャーをかけることなく、外に出て健康的な生活をする機会提供を推進している。中でも、カードゲームをする人は社会活動やウォーキングやサイクリングなど、他の運動、活動も積極的に一緒にする傾向があるという理由で、ブリッジの普及に対しても非常に協力的である。

第 3 項　　普及の実態

全国で 650 人のブリッジ教師が実働し、そのうちの 350 名が NBB の正規認定を受けた教師である。アクティブなブリッジ実施人口が 35 万人もいるため、ブリッジの認知度は高く、自然にブリッジに興味を持つ若年層が常に存在する。そのため、大学のクラブ活動、また各ブリッジクラブで丁寧に彼らを迎え入れる活動はしているが、定着率（当面の継続率）は決して芳しいとはいえず、若年層の普及は大きな課題である。

一方で、ブリッジ人口、会員の高齢化を否定的にとらえず、高齢者の普及を新たな会員獲得の機会とし、社会福祉活動との連携で、Denken en Doen（Thinking and Doing）という普及プロジェクトを立ち上げ実施している。内容は、ブリッジの「オークション」といわれる複雑な部分を最低限にし、一般に最も面白い部分のカードプレイに集中した週 1 回のレッスンを数回のパッケージにしたプログラムである。これを、高齢者の認知機能への効果と、社会参画（交流）の機会を掲げて、仕事を定年退職した 2 名のブリッジプレーヤーが専属セールススタッフとして、それぞれ 200 の担当自治体に文書と訪問で売り込みをかけた。この活動予算は支援を受けている前述の省庁から予定の倍額を得るまでになり、自治体主導のプロジェクトは、2019 年 3 月 11 日にスタートしたものを含め、少なくとも 77 の自治体、参加者数 6,525 名（平均年齢 67 歳）を数えている。パッケージでの習得以降、各地域のブリッジクラブが参加者の継続のためのフォローアップをしている。また、Denken en Doen を取り入れた自治体がその広報（広報誌、ダイレクトメールなど）にブリッジの活動、話題を組み込むため、一般のブリッジ認知度向上の有効な PR 活動につながっている。

第 4 項　　強化

強化は専任の技術担当ディレクターを中心とした TopBridge 部がジュニアからシニアまで強化に関する統括管理をしている。若年層については、国土の小さなオランダでは、全国のブリッジクラブや大学のクラブなどで頭角を現したプレーヤーがいればすぐに情報が入り、また彼らを招聘してのトレーニングやミーティングも容易にアレンジすることができる。また、代表候補となるトッププレーヤーたちについては、国際大会での上位入賞を命題に、ディレクターの判断で国内強化練習、強化のための欧州内遠征などが組まれている。

第 3 節　イングランド

第 1 項　　調査国背景

人口 5,533 万人（2018 年、PopulationUK）　英国最大のブリッジの NBO であり、Scottish Bridge Union と Wales Bridge Union が別途 WBF の傘下にあるため、世界大会の第 1 ゾーン（欧州）の出場権がかかる欧州チャンピオンシップには、フットボールやラグビーのワールドカップ予選同様に、それぞれに出場権がある。1936 年に、North-East、North-West、そして Yorkshire の 3 つの地方組織がイングランドを代表する NBO を設立することに合意してリバプールに設立された。　現在会員は 54,000 名、登録クラブは全国に 609。実施人口は EBU の推定で 25 万人であるが、The Times, Daily Telegraph そして The Mail のブリッジコラムによって、ブリッジというゲームの存在は読者の多くに知られており、また EBU に登録していないクローズドクラブも多数あるため、実際は EBU の推定人数以上ともいわれている。会員の平均年齢は 72 歳で新会員の平均年齢も 60 歳以上である（どちらも日本と全く同じ）。　若年層の会員誘致は以前より困難で、会員になるのは、国際試合での成績向上のために EBU が用意したユース強化プログラムに参加して代表を目指す若者が多い。

第２項　　ブリッジへの国の支援、ブリッジの属性（スポーツとの関係）

1937 年に制定され現在も有効な Physical Training and Recreation Act はフィジカルな動きが伴う競技以外は狭義的に「スポーツ」とは認めていない。また、マインドスポーツという定義、言葉の発祥国でありながら、国民の認知度は低く、ブリッジにスポーツという概念は結びついていない。従って、スポーツや文化の管轄官庁であるデジタル・文化・メディア・スポーツ省(Department of Digital, Culture, Media and Sports, DCMS）からの支援等が一切ないほか、様々な健康、教育、環境に関するプロジェクトやコミュニティグループへの助成のための資源となる The National Lottery Community Fund（旧 Big Lottery Fund)もブリッジに対してほぼ扉を閉ざし、EBU に老人や障害者を対象とした特別なプロジェクトがあれば、最大£10,000 を提供するにとどまっている。英国オリンピック委員会（British Olympic Association、BOA）への登録もなく、前述の 2002 年冬季五輪での女子ブリッジデモンストレーションの英国代表メンバーは、BOA の選手団に特別メンバーとしての参加すら許されなかった。EBU は競技ブリッジに対して、スポーツ活動に適用される付加価値税(VAT)の減免措置を求めたが却下されたため、2014 年歳入関税庁(HM Revenue & Customs)を訴えたが敗訴。2017 年には欧州連合司法裁判所に提訴したが再び敗訴となった。これにより、80 年前の法律とあわせて、英国ではブリッジの属性が完全に「スポーツ」にはないということで決着がついている。

第３項　　普及の実態

EBU がブリッジクラブ向けの指導と援助をする一方で、2011 年にチャリティ委員会（Charity Commission）からチャリティ団体として資格付与された English Bridge Education and Development（EBED）などの外部組織また各ブリッジクラブが直接に入門者、プレーヤー向けの普及活動を展開している。

(1) Membership Development Campaign (EBU): ブリッジクラブ向けの普及サポートプログラム。地元での PR 活動、マーケティング活動への助言、どのように訪ねてきた人たちを入門から初級、中級、競技会参加といったような流れにもっていけるかをアドバイスする。特に、インターネットの時代にクラブで行う対面式ブリッジが廃れないようにするための対策を各クラブに警鐘している。

(2) Bridge For All：EBED が開発した共通のラーニングシステムを採用。各人の時間的拘束、また習得速度の違いなどを配慮したシステムで、EBED のメンバーであるブリッジ教師が、「楽しむこと」を重視し、継続意欲につながる指導に重点を置いている。生徒は特典として EBU の 1 年間無料会員になり、会員特典を受けることができる。共通テキストを使うことによって、異なる場所で学んだもの同士でもすぐにパートナーとしてプレイすることができるというメリットはあるが、普及として大きな成果がまだ出てはいない。

(3) 学校でのブリッジ普及活動：EBU の主体的プロジェクトはなく、EBED が中学校などで課外授業としてブリッジ普及の活動を始めている。また Stamford Youth Bridge Academy など、地域のブリッジクラブが率先して、能力開発やパ

ートナーシップの形成などへの有効性を説いて、地元の学校と共同で若年層のブリッジの機会を創出している。また、私的なチャリティ団体である David Davenport Foundation による Bridge4Kids プログラムは小学校でのブリッジ授業、クラブ活動を推進し、2012 年以来ロンドン地区で 15 校に導入されている。（学校の教師にブリッジとその指導方法を教え、その他必要なサポートを全て無償で行っている）

(4) マーケティング：各ブリッジクラブが、地域で自主的に行う会員募集活動（広報ツールの作成など）に対して補助金を提供する Membership Development Campaign を EBU が実施している。

第 4 項　　強化について

複数のユースグループ(squads)には週末を利用したトレーニングを提供しているほか、主に欧州内での国際試合参加には遠征費用の援助がある。それ以外のプレーヤーに対する特別な強化策は設けていない。トッププレーヤーには国内外にクライアントを持つプロも多く、彼らに対しての強化は配慮されていない。Premier League を頂点に国内だけでも腕を磨くための数多くの試合があり、また欧州を中心に海外のトッププレーヤーが参加する国内試合も多い。代表チームに対しては、欧州各国の代表チームからの練習試合の要請もあり、EBU として対応はするが費用は殆どの場合プレーヤーが負担する。最も重要な世界大会、また欧州選手権には、EBU の予算を組んで各カテゴリーにコーチやキャプテンをつけて派遣している。しかし、その金額が大きすぎると多くの会員から指摘があり、強化・遠征にかかる予算の減額を検討中である。

第 4 節　中国

第 1 項　　調査国の背景

人口 13 億 9 千万人 (2019 年、外務省)。WBF に報告されている CCBA の会員数は 81,500 名であるが、WBF への年間登録料が NBO の会員数で計算されるため、実際にはそれ以上いるといわれている。登録ブリッジクラブは大学、企業内を含めて全国で 200 以上ある。熱烈なブリッジ愛好家であった鄧小平氏が大学でのブリッジ活動を推奨した。中国が世界大会で頭角をあらわしてくるのは 1990 年代以降で、現在 40 代後半～50 代のトッププロの多くは北京大学など一流大学出身者である。ブリッジはエリートスポーツであり、起業家、経営者の中にはブリッジ愛好家も多く、学生時代のブリッジでの活躍が就職に有利に働くこともある。また、A リーグを頂点とする中国リーグにはスポンサー企業のクラブチームが多く、プロとしてクラブでプレイすることにより一定収入（所属プロなら 600 万円～）を確保することができる。小学生から大学生、或いは就職して数年内に覚える人が殆どで、他国と異なり、高齢になってレジャー(余暇活動)として始めることは稀である。

第 2 項　　ブリッジへの国の支援、スポーツとの関係

中国においてマインドスポーツのブリッジはフィジカルスポーツと同様に国家体育総局

（General Administration of Sports of China）が統括する競技種目である。総局内の棋牌運動管理中心橋牌部、中国コントラクトブリッジ協会(CCBA)の活動資金は国家予算の一部である。WBF 主催の主要国際競技大会の招致も国として積極的に行い、立候補都市選択から協賛企業集めに至るまで国家機関が主導している。

第 3 項　　ブリッジの普及

国際大会でのメダル獲得が至上目的であるため、エリート養成の観点からも、普及活動は小学生を含め若年層に集中している。北京と上海を中心に、大都市のいくつもの小学校でブリッジが課外活動に取り入れられ、また学齢に合わせた大会で競技の面白さを体験できるように図られている。これら学生たちも、高校生になるといったん大学受験準備のためにブリッジから離れがちであるが、大学入学以降に活動を復活する率は高い。

第 4 項　　強化について

「ガールズ（26 歳未満の女子)」のカテゴリーを例にとると、代表チームメンバー入りを目指すものは、基本誰でも上記機関による強化プログラムに参加することができる。国土が広いため、インターネットのブリッジ専門サイト Bridge Base Online（BBO)*[5]が汎用される。コーチが監視する中での練習で、練習後指導コメントと宿題が毎回課せられるシステムである。ペアリング、チーム構成などもコーチからの指示もあり、選抜試合に勝利したチームが代表となり、国際試合、また準備段階での海外遠征（費用は全て援助）に参加する。中国では、全体的にウィメンズとユース(ガールズ、キッズ含む)への強化が重視され、その成果はすでに顕著に出ている（表 3)。プロが中心のオープンは、中国国内トップリーグである A リーグやスポンサーチームでの海外試合などで腕を磨く機会が多い。尚、中国リーグでは、各チームに外国人枠(2 名迄)を設け、海外からのプロプレーヤーを含めたレベルアップした国内トップリーグで腕を磨く機会が創出されている。前述のポーランドやオランダなど海外のプロプレーヤーにとっても中国プレーヤー同様に強化の機会であるが、さらに 1 週間の試合でのプレイフィーが 5 千ドルから 1 万 5 千ドル（旅費、宿泊費等経費は別途支給）と好条件となっている。

第 5 節　日本*[6]

第 1 項　　ブリッジへの国の支援、ブリッジの属性（スポーツとの関係）

前述のとおり、2018 年のアジア競技大会への JOC の日本選手団入りにあたり、2017 年度に承認団体として初めて JOC に加盟、大会年の 18 年度は準加盟団体、そして 19 年度には再

---

*[5]BBO は最大規模のブリッジ専門サイトの 1 つ。学習や練習ツールが揃っているほか、オンラインでの様々なゲームを 24 時間提供している。入賞者にはポイントや BBO で利用できる $ が賞品としてつくゲームも多数ある。国際試合また各国の主要試合を解説付きで生中継をする。ビル・ゲイツが資本参加している。

*[6]調査国背景は第 1 章第 3 節で言及済みのため省略。

び承認団体として、スポーツ競技団体に属している。このために、海外競技大会の遠征費用の助成を日本スポーツ振興センター（JSC）より、18 年度（約 300 万円）、19 年度（約 200 万円）を受けている。外部機関からの助成は殆ど前例がなかった。

第 2 項　　普及の実態

新規参入のプレーヤーの高齢化が進む中で、学生また若手プレーヤーの拡大を重視している。一方で、直近では熱心に競技会に参加するプレーヤーだけでなく、趣味の 1 つとして「ブリッジをゆるりと楽しむライトユーザー」を増加させることも目標に掲げている。下記（ゲームイベントと YouTube ビデオ制作以外）は近年継続されてきたものであるが、ROI の設定が曖昧で効果の評価が難しい。

① 大学プロジェクト：年間約 5 百万円をかけて、早稲田大学、青山学院大学、明治大学、東京大学、大阪大学の 5 大学で、単位取得のできるブリッジ関連の授業として JCBL が講師派遣含めて提供している。毎年数百人（2018 年度の単位取得学生数は 394 人）の大学生がブリッジ体験の機会を得ているが、履修後そのままブリッジを継続する学生は殆どいない。

② こどもプロジェクト：小学生から高校生を対象とした「橋之介くらぶ」（会費無料）のほか、体験教室、ミニブリッジの大会など主要ブリッジクラブとの連携で開催しているが、殆ど JCBL のホームページが PR ツールのため、参加人数が集まらず成立しない会も多い。

③ 体験教室・普及支援：ブリッジクラブや個人またグループでのブリッジ普及活動に対し、教室用ツールや助成の提供を行っている。また主要ブリッジクラブで開催予定のブリッジ体験教室の告知広告をまとめて朝刊紙等で掲載している。

④ 若年層成人向けプロジェクト：ゲームショウ（最近開始）、国民文化祭など様々なイベントに参加し、来場者にブリッジを体験の機会を提供している。

⑤ YouTube 用の普及ビデオを準備中。

第 3 項　　強化について

2022 年のアジア競技大会杭州大会での好成績、また 2026 年同競技大会愛知大会での競技種目採用を目指すためにも強化は必要であると事業目標に掲げているが、実際に強化活動として準備、提供されているのは大学生を中心としたグループのみとなっている。この中には、これまで女子学生が複数含まれることが長年なかったが、2019 年初めてガールズのカテゴリーで海外のユース大会にチームを派遣するにいたった。その他のカテゴリーについては、派遣代表チームに限って、派遣前の JCBL 主催の競技会への招待、練習場所の提供程度の支援に限られている。またその他のサポートでは、世界大会参加国の殆どがチームにコーチを帯同させているのに対し、日本は競技団体にその準備がない数少ない国である。

表６　調査対象国の９項目に照合した結果サマリー

項目 / 国	1.普及・強化対象の明確化（ターゲティング、セグメンテーション）	2.ナショナルチーム代表レベル・予備軍のための強化等のサポート	3.普及・強化のための施設（プラットフォーム）	4.競争システム（国内外の競技大会の頻度、アクセス度）	5.多角的側面（教育、科学・医学、社会福祉）での研究、検討によるサポート	6.公的支援の有無とパートナーシップの充実度	7.普及と強化のための、バランスのとれた統合的な資金調達と組織構造。	8.PR活動（競技の認知度アップほかのため）	9.属性（立ち位置）スポーツ＆マインドスポーツvs トランプゲーム
ポーランド ①11,000* ②200,000*	◎明確化＋幅広い（小学生から高齢者まで）	ユースの育成・強化、ウィメンズの強化に注力	全国のブリッジクラブ、U3A、大学、小中学校など	初心者から上級者まで各レベルの競技会多数。主要国際大会には代表派遣。	認知症（高齢者）や数学能力(小学生）への効能、高齢者のウェルビーイング関連の研究	Ministry of Sports, Ministry of Social Careから資金援助＋プログラムＰＲ援助＋後援	普及◎＞強化〇普及が最優先だったが、強化資金増加を決定	重要視。SNN, メディアを積極的に利用。国会議員もＰＲに協力。	スポーツ（スポーツ省）、NOC加盟。
オランダ ①118,000* ②350,000*	〇明確化（普及は特に高齢者）	NBO内に強化専門部署あり	全国のブリッジクラブ、地方自治体施設など	初心者から上級者まで各レベルの競技会多数。欧州内の競技会参加のアクセス良好。国際試合には全カテゴリーでメダル獲得を目指して選手派遣。	高齢者のウェルビーイング関連の研究。	①Ministry of Public Health, Wellbeing and Sportsの支持のもと、オランダオリンピック委員会から資金その他の援助を受けている ②高齢者の普及については地方自治体と連携	普及◎≦強化◎普及は地方自治体への販促専門スタッフ２名ほかを配置、強化は強化部が。結果を出す明確な組織構造が構築されている	パートナー(例えば地方自治体）との連携	マインドスポーツ：フィジカルスポーツとは異なるとの判断はされたが、NOCに加盟
イングランド ①54,000* ②250,000*	普及:ad hoc 強化:若年層（中学生～）	ユース（ジュニア以下）の強化プログラムあり。	全国のブリッジクラブ	国内競技会多数。(最高峰はプレミアリーグ）主要国際試合への代表派遣(フルサポート）	健康とウェルビーイングに関する調査研究(結果は公開）Stirling大学がブリッジの社会学的研究を開始	官公庁からの資金援助なし	公的資金がなく、会員からの会費、ブリッジクラブの登録料、競技会収入によって運営 強化費に対して一般会員の反対に対応中	ブリッジクラブの自主的なＰＲ活動への補助金制度あり	なし（スポーツ競技の減免措置を求めるも敗訴）
中国 ①81,500** ②確認不可	◎普及は小中学校を中心とした若年層。　◎強化はユース（キッズ含む）とウィメンズ。	体育総局ブリッジ部が強化プログラムを実施。	国家体育総局が全国ブリッジクラブと連携。インターネットを多用。	Ａリーグを頂点とする中国リーグほか国内競技会多数。国際試合の招致多数。優秀強化指定選手は海外主要試合へ強化目的で派遣。	小中学校での課外授業やクラブ活動(特に北京、上海など都市部）	中国国家体育総局が普及・強化を管轄。スポンサー企業招聘も管理	普及〇＜強化◎国際試合での実績が起点となって若年層の普及は付随効果	重要視　特に国内外の競技会の結果や招致した国際大会の模様をホームページ、メディアの積極活用で情報発信　主要競技会の模様は生中継	スポーツ/マインドスポーツ（国家体育総局）
日本 ①7,286* ②200,000*	普及：大学生(5大学で正規講座）, 子供（体験教室不成立多）	代表チームを連盟主催試合に招待、練習会場の無償提供	常設、仮設のブリッジクラブ。カルチャーセンター等でのブリッジ教室	首都圏を中心に主要クラブでは競技会多数。WBF、APBF主催の主要試合に代表派遣	5大学で正規講座。	日本スポーツ振興センター(JSC)から世界大会への代表選手派遣費用の助成ありスポンサー企業殆どなし	強化(消極的）ｘ普及活動(年約1千万）KPI設定弱い 年間約２億３千万の予算は殆どを会費と競技会収入から。	主要クラブの体験教室を朝刊紙等で毎年一斉告知　HPやSNSは活用も、専任不在で非競技者に対する情報発信量少ない	なし(狭義：スポーツ基本法）マインドスポーツ（広義：JOC承認団体）

NBO 登録人数　②　実施人口　*NBO 回答　**WBF HP 参照

第 5 章　考察

第 1 節　普及の対象

前出の Scott (1991) の先行研究にあったアメリカのブリッジの高齢化と若者離れという日本にもある現象は、オランダとイングランドに見られた。今回の研究で、ポーランドと中国においては、NBO や政府機関主導による、小・中学生を対象に学校を絡ませた普及プログラムがあり、競争心を煽る試合形式なども取り入れて、子供たちの興味が持続し、ブリッジの継続を促す試みをしていることがわかった。早い(若い)段階で、ブリッジに触れる身近な機会、そして継続のためのフォローが整うことが、この 2 か国での多くの若年層を含めた全世代にまたがるブリッジ人口構成を可能にしていると推測できた。子供の参加人口の多さが普及や強化の両面で重要であるとのオーストラリアのラグビーにみたフィジカルスポーツでの先行研究（Carney et al, 2009）がマインドスポーツのブリッジにも適応していた。事実、中国では、大学受験で一旦ブリッジから離れた学生が大学入学後に再開するケースが多いことが確認できた。また、NBO に顕著な取り組みのないイングランドにおいても、一部のチャリティ団体、またローカルクラブが積極的に小・中学校でのブリッジ普及に取り組み始めており、今後の展開が注目される。さらに、他のマインドスポーツの囲碁では、日本棋院が学校普及事業を立ち上げて、自治体・教育委員会、学校との連携で、子供の知的好奇心や情操教育を掲げて囲碁に触れる機会を正規、非正規で取り込ませる取り組みを始めており、成果をあげていることもその一例である。ブリッジにおいても、広報活動が不十分で不成立の多い現在の子供向け体験教室だけでなく、学童や児童館でのプログラム、小・中学校での課外活動などへの遡及の検討が有効と推察される。

日本の普及策の中心である 5 大学での単位取得授業は、ポーランドと同様に学生にブリッジに触れる機会を提供しているが、受講者たちがその後大学ブリッジクラブに加入したり、また地域のブリッジクラブに参加するようになった（目に見える形で競技人口に加わった）という報告は殆どない。オランダやイングランドにおいても、大学生を中心に若者を歓迎するプログラムや強化を提供しているが、どちらもジュニア（26 歳未満）代表メンバーを目指す限られたグループだけが残るという傾向があり、オランダの NBO が指摘した「質」はよいが「量」が整わないという状態であった。このことから、興味や価値観の幅が広がってしまった、或いはすでに趣味や余暇活動の選択が定まってしまった大学生からの普及活動はそれ以下の学齢を対象とした活動と比べて効果が低い、つまり一定数を達成するためにはスタートが遅いのではないかという新たな仮説が生まれた。(今後、立証のための縦断研究も面白いかもしれない。)

元来ブリッジは超高齢者を含め、幅広い世代で楽しめるゲームである。また「若さ」よりも「経験」が勝ることが多いことも魅力であり(Punch et al., 2018)、フィジカルスポーツと異なり第一線の競技者でいられる期間が大幅に長いことも特徴である。さらに、先行研究が示した通り、高齢者にとってのブリッジの効用は多い。多くの国で、実施人口の主構成員は高齢者であるがブリッジクラブのビジネス面で考えれば、時間に余裕のある高齢者、退職者は

最大の優良顧客層であり、高齢者が多いことはブリッジというゲームの強み(strength)でもある。その前提で、ポーランドとオランダでは、政府の支援を得て高齢者向けの本格的なブリッジ普及プログラムが、認知能力低下や社会からの孤立阻止、高齢者のブリッジを通してのウェルビーイングを促進させるという命題で実施され、プレーヤー増加につなげている。超高齢化社会の日本においても、認知症発症率や健康寿命の延伸が、国家（社会保障費の逼迫）だけでなく個人にとっても大きな関心事となっており、ブリッジの効用に焦点をあてた 2 か国の高齢者向けの普及の取り組みは 1 つの指標となるかもしれない。ただ、日本ではとかく高齢者向けというとマイナスのイメージが伴いがちであるためイメージ面で一工夫が必要となろう。

またオランダやポーランドの高齢者向けの活動では、先行研究や基礎調査のアンケートにもあったブリッジ普及の大きな障害である習得の難易度を軽減する特別のテキストやレッスン方法が用意されていた。初心者に教えることが最も難しいといわれるブリッジで、この準備は非常に労力を要するが、入門段階で脱落者を多くだしてしまう日本では、2 か国の指導方法、テキスト内容の研究は有効であろう。

最もブリッジから離れやすい「現役(社会人)世代」（26 歳～55 歳）への普及プログラムとして Polish Bridge Union は 2019 年から企業に直接にブリッジの推奨活動をしていた。成果はまだ出ていないが、企業内の余暇活動の衰退がブリッジ人口の減少に影響を与えている日本の現状とポーランドのこの取り組みには社会ならびにブリッジ環境のズレを否めない。一方で、PBU が以前から行っている職業別競技大会は、ブリッジから離れがちなこの世代の初心者からエキスパートまでのプレーヤーに、ブリッジだけでなく、同業者同士のネットワーキングの場を提供して、彼らとブリッジとの距離を縮めさせることを目的として成果を出しているという。JCBL の唯一の社会人向けプロジェクトの企業対抗戦が枯凋する中で参考となる事例である。このように、対象に合わせて様々な工夫をこらす姿勢は、普及をミッションとする競技団体に見られるべきものであろう。

第 2 節　普及と統合した強化

草の根の参加者（実施人口）増加とハイパフォーマンスのための活動を統合的に実現すべきだというフィジカルスポーツの先行研究結果と同じことがブリッジに適合した。前節で述べたポーランドと中国での小学生からの普及の取り組みが、ハイパフォーマーの創出にもつながる高い可能性を強く示唆している。日本で唯一、中学・高校でブリッジ部のある私立開成中学・高校の中学 2 年生ペアが、大学生とともにジュニア代表に選抜され、出場した国際試合では大学生を圧倒する優秀な成績を収めたことからも、早くに始める優位性は、それだけが要因ではないとしても、日本でも注目されている。

普及と強化のつながりは、NBO の自己資金確保の面でも重要である。中国のように政府から強化費用が十分に提供される国は例外で、通常は競技団体がその費用を捻出しなければな

らない。原資の中心が会員から得る会費や競技会収入のため、「競技人口」が増えないとそれだけ強化に回る資金も増えないということである。

NBO の強化に取り組む姿勢としては、中国を除けば、団体内に技術監督と専任部署を配置しているオランダが他国より進んでいた。世界大会への切符を手にした各ゾーンの代表チームには、通常帯同が必須の「キャプテン」の他に、殆どの場合で「コーチ」が伴い、準備期間から競技会中まで技術面のサポートを行ない、その費用は NBO が通常負担している。日本（JCBL）はコーチ付与をサポートしない例外的な国の 1 つで、その理由に投資効果への疑問と一般会員の強化に対する理解不足をあげている。奇しくも活動原資に政府援助のないイングランドでも同様の理由で強化費用の減額を検討というのが興味深い。

第 3 節　政府機関の支援、ブリッジの属性について

特例的な中国を除く欧州 3 か国の取り組みからも、政府機関ほかの支援は非常に重要ということが明らかになった。資金面でみれば、ポーランド、オランダが得ている数万ユーロの助成金は千人単位の年会費収入に匹敵し、フィジカルスポーツと比べて実施が低コストのブリッジにとってはそれなりに価値がある。特にポーランドの Ministry of Social Care からの援助では、地域自治体と連携で高齢者に呼びかけ、無償でのブリッジ体験、継続ができている。政府、自治体お墨付きのプログラムは様々な形で宣伝がなされ、高齢者に限らずブリッジの認知度向上につながっているという。また、オランダの取り組みについても、「政府機関の支援を受けているマインドスポーツ」の高齢者向けパッケージという側面が、自治体への売り込みに役立っているほか、採用自治体の高齢者住民に対する広報活動によって、安心して興味を持ったという参加者が多いという。これら国や自治体の支援を得るにあたり、ブリッジが心身に様々な効用のある「マインドスポーツ」（国によっては「スポーツ」）という属性は鍵である可能性が高いという仮定がインタビューから出てきた。事実、出資がスポーツや健康、福祉を管轄する省庁に多いということも、その裏打ちかもしれない。（2019 年 11 月に行った調査国以外の NBO への属性と支援についての調査結果を巻末資料に添付した。）

NBO が単なる趣味・余暇活動（hobby/ leisure）のカードゲームとしてのブリッジをとりまとめる団体であるならば、一部のプレーヤーの上達に会費が使われ、自分たちの勝つ機会が損なわれることに不満を持つ会員がイングランドで出てきたことも理解できる（日本でも同様の傾向がこれまでみられてきた）。日本は、JOC の承認団体になり、フィジカルスポーツと同じ舞台（2018 年アジア競技大会）に立った。また、スポーツ庁が制定したスポーツ団体ガバナンスコード＜中央競技団体向け＞（令和元年 6 月制定）の対象団体として、基準のガバナンス、コンプライアンスの遵守を求められている。定款にもある「マインドスポーツとしてのブリッジ」という属性をあらためて普及や強化で強調、活用する機会を得ている。調査国の取り組みから、対策検討、実施のための指標は得られたと考える。

第 6 章　結論

本研究の目的は、他国における普及と強化の取り組みを明らかにすることにより、マインドスポーツとしてのブリッジの普及と技術向上および発展を目指す日本の指標を見出すことであった。調査対象国には近年全カテゴリーで上位にいる強豪国を選択し、主に競技団体または関係者に、それぞれのブリッジ事情を含めた半構造化インタビューを実施した。その結果、調査国のポーランド、オランダ、中国、イングランドのうち前 3 か国が確固たるコミットメントと戦略をもって、普及と強化に取り組んでいることが判明した。彼らのプロジェクトの根底には、「ブリッジというプロダクトの特性は何か？」、「どのように活用するのか」、「誰にさせるのか？」、そして「そのためには何が必要か？」というマーケティングの基本的な発想があり、そこには子供から高齢者まで幅広い世代が楽しめるゲームというブリッジの優れた特徴が活かされていた。また、ポーランド、オランダの競技団体は、「面白いゲーム」という当事者にしか通じない一面で普及するのではなく、その効用を研究し活かすことによって、ブリッジが社会問題にどのように役立つかということを具体的な形で示し、スポーツ、健康、ウェルビーイングや社会福祉の管轄官庁、地方自治体、関連団体（オリンピック委員会など）の支援と連携で有効なプロジェクトが可能となっていた。一方で、イングランドの NBO は普及については外部依存型で、強化も他調査国と比べて十分とはいえず、資金調達などを含めて日本との類似点を多くみた。それでも、現在も強豪国であるのはブリッジ先進国が培った競技力やブリッジに関わるビジネスの成熟度、日本の 7 倍以上の登録人口など別の要因があるということであろう。さらに、フィジカルスポーツの先行研究が示した子供からの取り込みや競技自体の高い認知度と競技に感心を高めるための道筋、そして政府等からの支援といったことが普及と強化に多大な効果があることが特に中国、そしてポーランドでも検証された。事実、すでに他のマインドスポーツである囲碁で、日本棋院がその点を考慮した対応がなされていた。異なる経済・社会事情やブリッジ環境であったとしても、調査国のベストプラクティスは日本のブリッジの普及、ひいては発展のために今後検討するに十分に値するものであった。

マインドスポーツ、とりわけコントラクトブリッジという日本ではほぼ先行研究のない分野を取り上げたが、奇しくも、本研究開始に少し先立ち、英国スコットランドの Stirling 大学が「ブリッジの社会学」の研究を本格的に立ち上げていた。そして、すでにこの 1 年でクロアチア、ポーランド、ノルウェー、米国などの社会科学、人間科学等の研究者で国際ネットワークが構築されつつある(2019 年 11 月のノルウェーでの第 1 回会合に招待されたが欠席)。新研究分野の国際的な発展を期待したい。

第 7 章　引用文献

Ashwarth, R., Punch, S. & Small, C. (2016) A Review of Possible Interventions Into Healthy Ageing and Cognitive Stimulation:　Exploring the Links between Bridge and Dementia, Aylesbury:　English Bridge Education & Development (EBED)

Brkljačić, T., Sučić, I. & Brdovčak, B. (2017).　Serious Leisure Activities and Well-being of Senior Citizens:　The Case of Contract Bridge, Andragogiczny, 24:　157-174

Caesar, E. (2016) How Bridge Became Cool
http://www.independent.co.uk/news/uk/this-britain/how-bridge-became-cool-426099.html
(最終閲覧 2019/12/24)

Carney, M., Smolianov, P. & Zakus, D.H. (2012).　Comparing the practices of USA Rugby against a global model for integrated development of mass and high performance sport. Managing Leisure:　An International Journal Special Issue:　The Management of Excellence in Sport, 17 (2-3), 182-206

Clarkson, S., Hartley, A.A. (1990) The game of bridge as an exercise in working memory and reasoning.　J Gerontol 1990 No 45(6), 233-238

Cohen, S. (2004) Social relationships and health. American Psychologist, 59 (8), 676-684

Galbraith, C., Punch, S. and Small, C. (2018) Competition and Mental Exercise in a Mind Sport: Building Bridges of Fun and Friendship, Aylesbury: English Bridge Education & Development (EBED), http://www.ebedcio.org.uk/health-wellbeing-research.　(最終閲覧　2019/11/30)

Godbey, G.C. & Scott, D. (2012). An Analysis of Adult Play Groups: Social Versus Serious Participation in Contract Bridge. Leisure Sciences, Volume 14, 47-67

Hanstad, D.V., & Skille, E.Å Does elite sport develop mass sport?　A Norwegian case study. Scandinavian Sport Studies Forum proceedings, 1. 51-68.

Jang, Y, Mortimer, J, Haley, W.E., Graves, A.R.B (2004) The role of social engagement in life satisfaction:　Its significance among older individuals with disease and disability.　Journal of Applied Gerontology, 23(3) 266-278

Judge, K. & Punch, S. (2019) Lessons Learned from Bridge Lesson: A Sociological Exploration of the New University of Stirling Bridge Club, Stirling International Journal of Postgraduate Research (http://spark.stir.ac/uk/issues/issue5/)

McDonnell, D., Punch, S. & Small, C. (2017) Individual Wellbeing and Bridge: An Empirical Analysis, Aylesbury: English Bridge Education & Development (EBED)

Punch, S. & Graham, E. (2018) 'Elite Bridge Players': Motivations to Participate in the Mind Sport of Bridge, 2nd academic conference on Recreational Activity and Bridge, Nicolaus Copernicus University, Torun, Poland 5 December 2018

Punch, S. & Graham, E. (in press). Elite Bridge Players' Motivation: Well-being, Healthy Ageing and Social Connection.

Punch, S & Russell, Z. (in press) 'Temperament is Everything': Partnerships and Emotions in the Mind Sport of Bridge. Leisure Studies Annual Conference, Abertay, 9-11 July 2019

Scott, D. (1991). The Problematic Nature of Participation in Contract Bridge: A Qualitative Study of Group-Related Constraints. Leisure Sciences Volume 13, 321-336.

Scott, D. (1991). A narrative analysis of a declining social world: The case of contract bridge. Play and Culture. 4. 11-23.

Shaw, C. (2007) Statistically speaking. ACBL Bulletin 2007
http://web2.acbl.org/documentLibrary/teachers/statisticallyspeaking.pdf
(最終閲覧 2019/06/26)

Smolianov, P., Gallo, J. & Naylor, A.H. (2014). Comparing the practices of USA tennis against a global model for integrated development of mass participation anJournal of Sport d high performance sport. Managing Leisure Vol.19, No4 283-304, DOI: 10.1080/ 13606719.2014.885717

Smolianov, P. & Zakus, D.H. (2009, May). Integrated development of mass and high performance sport: A global model. Olympic Reform: A Ten Year Review Conference, Toronto, Canada.

Sotiriadou, K. & Shilbury, D. (2009) Australian Elite Athlete Development: An Organisational Perspective. Sport Management Review 12 (2009), 137-148

Sotiriadou, K., Shilbury, D. & Quick, S (2008). The attraction retention/transition and nurturing process of sport development: Some Australian evidence. Journal of Sport Management. 22 (3), 247-272.

Steffens, NK., Cruwys, T., Haslam, C.et al. (2016) 'Social group memberships in retirement are associated with reduced risk of premature death: evidence from a longitudinal cohort study' BMJ Open 2016

Vedantom, S. (2003) Mind Games May Trump Alzheimer's. The Washington Post https://www.washingtonpost.com/archive/politics/2003/06/19/mind-games-may-trump-alzheimers/87cf4708-4c6c-4bcd-8a76-ce49af8d6cc3/ (最終閲覧 2019/12/24)

Verghese, J. (M.D) & Lipton R.B. (M.D) et al. (2003) Leisure Activities and the Risk of Dementia in the Elderly. The New England Journal of Medicine 19 June 2003 , 348:2508-2516

菅原育子（2016）高齢者の社会とのつながりと健康および well-being への経路。老年社会科学 第 38 巻第 3 号, 351-356

長ヶ原誠、山口泰雄＆池田勝 （1992）高齢者におけるスポーツ活動への再社会化に関する研究. 鹿屋体育大学学術研究紀要第 7 号、32-41

水野紀男 （2010）高齢社会における余暇活動に関する一考察 - 団塊の世代が形成するクラブ型余暇社会 - . 学苑 No835, 38-50

武藤泰明、三浦一輝＆笹川スポーツ財団(2019) 中央競技団体現況調査報告書, 4

Chinese Contract Bridge Association www.ccba.org.cn/Index.aspx
(最終閲覧 2019 年 11 月 30 日)

国家体育総局棋牌運動管理中心橋牌部 Bridge Division, Administration of Sports of China www.sport.gov.cn (最終閲覧 2019 年 11 月 18 日)

England Bridge Union www.ebu.co.uk (最終閲覧 2019 年 12 月 14 日)

Denken en Doen www.bridge.nl/kennisbank/hef-project-denken-en-doen/
(最終閲覧 2019 年 12 月 14 日)

Topbridge www.bridge.nl/kennisbank-orderwerp/topbridge/ (最終閲覧 2019 年 12 月 26 日)

PopulationUK　https://www.ukpopulation.org/england-population/（最終閲覧 2019 年 11 月 1 日）

World Bridge Federation www.worldbridge.org （最終閲覧　2019 年 12 月 20 日）
日本コントラクトブリッジ連盟　Japan Contract Bridge League　www.jcbl.or.jp（最終閲覧 2019 年 12 月 20 日）

日本棋院　https://www.nihonkiin.or.jp/teach/gakkouigo/（最終閲覧　2019 年 12 月 20 日）

世界の統計 2019　総務省統計局　　http://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2019half1.pd
（最終閲覧　2019 年 12 月 24 日）

外務省　https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html（最終閲覧 2019 年 12 月 24 日）

巻末資料

世界ブリッジ連合傘下の競技団体（NBO)への簡易調査（2019年11月実施）

国名	回答者氏名/役職/組織名	NOC登録	ブリッジの属性	政府（ほか）支援
Belgium ベルギー	Dominique Stuyck, Secretary of Royal Belgian Bridge Federation	Yes	Mind Sport	No
Cyprus キプロス	Frosso Tillyris, Secretary, Cyprus Bridge Federation	Yes	Sport	Yes. Cyprus Sports Authority (KOA)からの経済支援
Estonia エストニア	Sven Sester, President of the Estonian Bridge Federation	Yes	Sport	Yes, 毎年€25,000-30,000を政府から資金援助を受けている。通常はスポーツや文化を管轄するMinistry of Cultureの専門機関から受け取るが、ここ数年は同省内にあるHasartmängu Nõukoguというギャンブル関係の税務部門から資金援助。来年はNOCからの資金援助となることが決まっている。
Greece ギリシャ	Anastasia Bampoula, Lessons Department, Hellas and Hellenic Bridge Federation	Yes	Mind sport	Hellenic Bridge Federation(ギリシャブリッジ連盟）はGenral Secretariat of Sports に承認され、些少の資金援助を得ている。
Lithuania リトアニア	Erikas Vainikonis, President, Lithuanian Bridge Association	Yes	somewhere in the middle (中間)	No
Romania ルーマニア	Marius Georgescu, General Secretary, Romanian Bridge Federation	Yes	Sport	Ministry of Sports 年間約€10,000の資金援助。
Saudi Arabia サウジアラビア	Khaled Al-Kattan, President, Saudi Bridge Committee	Yes	Sport	Yes Soudi Arabia Federation for Electronic and Intellectural Sport SAFEIS から些少の資金援助。
South Africa 南アフリカ	James Grant (jgrant@telkomasa.net), President, South Africa Bridge Association	Yes (SASCOC - National Sports Council)	Mind Sport	Yes - National Sports Council (SASCOC) から些少の援助
Chinese Taipei 台湾	Cheng-Hong John Hsieh, Commissioner for International Affairs, Chinese Taipei Contract Bridge Association	Yes	Sport	Yes - Ministry of Education内のSports Administrationから資金援助。
Thailand タイ	Contract Bridge League of Thailand, Chairwoman, Khunying Chodchoy (Esther)Sophonpanich	Yes	Sport/Mind Sport	Yes Ministry of Tourism and SportsのSports Authorityからの資金援助。
New Zealand ニュージーランド	Alister Stuck (secretary@nzbridge.co.nz), National Secretary, NZ Bridge Inc	NZOC and Sports & Recreation Councilの準会員	Mind Sport	No
Bermuda バミューダ諸島	Brenda Dale, Vice President, Bermuda Olympic Association	No	No	Yes Ministry of Youth, Sport & Recreation
Botswana ボツワナ	Letsogile Mafa, President, Botswana Bridge Federation	No	Sports	Yes, Ministry of Sports (Botswana National Sports Council BNSCを通して)から資金援助
Czech チェコ	Milan Macura（mil.macura@gmail.com), President, Czech Bridge Federation	No	Mind Sport	Ministry of Education and Sportsから、スポーツ組織管理、競技会遠征、若年層活動の３つに資金給所。
Denmark デンマーク	Louise Dhirani, Administrativ Koorinator, Danmarks Bridgeforbund	No	Mind Sport	Ministry of Cultureから毎年資金援助あり。（デンマークマインドスポーツ協会に登録している他の団体と同様）
France フランス	Valerie Besse, Chief Executive Officer, Fédération Français de Bridge	No (e-sportsは登録)	Mind Sport	No
Hungary ハンガリー	Dr Homonnay Geza, President of Hungarian Bridge Federation / Adam Magyar, General Secretary Hungarian Bridge Federation	No （Committee of Non-Olympic Sportsの会員）	Sport	Ministry of Human Resources (スポーツ局）から年間 USD150,000の資金援助、また別途競技会開催のために年間 約USD150,000が援助がある。
India インド	Anand KS Samant, Honorary General Secreatry, Bridge Federation of India	No (登録手続き中)	Mind Sport	Sports Authority of India (Ministry of Youth Affairs and Sports が管轄)
Korea 韓国	Sung Kyunghae, Former President of Korea Contract Bridge League	No (参加に向けて調整中)	Mind Sport	No しかし現代(Hyndai)グループが資金援助(スポンサー)
Latvia ラトビア	Jelena Alfejeva, President, Latvian Bridge Federation	No	Sport	Ministry of Education and Scienceから資金援助あり
Mexico メキシコ	Bronia Nosnik, Marketing Director, Mexican ACBL Board	No	Mind Sport	No （実施人口推定500名のうち競技会参加人口は20名程度）
Norway ノルウェー	Sten Bjertnes, National Team Coordinator, Norsk Bridgeforbund (The Norweigian Bridge Federation) Allan Livgard, General Secratry, Nosk Bridgeforbund	No	2006年からノルウェー・マインドスポーツ連盟にチェスと登録しているが、実体（活動）なし。	No. 例外として、児童・青年関連の活動に対してはThe National Council of Norway(Frifond/LNU)から100,000NOKがブリッジ活動としてローカルブリッジクラブに支給される。ブリッジ協会は消費税の減免措置あり
USA アメリカ	United States Bridge Federation (USBF), Jan Martel, Chief Operation Officer	No	No	No

ブリッジプレーヤーの実態調査　　(無記名式）

この度は、アンケートへのご協力を誠にありがとうございます。質問の数は多いですが、最後までお付き合いいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

アンケート結果は研究の資料としてだけでなく、JCBLならびにJCBL公認ブリッジクラブ（希望があった場合）に提供して、ブリッジ普及や環境の改善に役立てていただきます。また英国Stirling大学のブリッジ社会学の研究グループの参考資料ともなります。ご質問、ご意見がございましたら、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科　柳澤彰子 (akiko.yanagisawa@ruri.waseda.jp) までご連絡ください。

* 1. 性別

- ◯ 男性
- ◯ 女性

* 2. 年齢

* 3. お住まい　（都道府県、海外の場合は国・都市名を記入ください）

* 4. 最後に卒業した学校はどれですか？（差支えなければお答えください）

- ◯ 高校
- ◯ 短大・高専
- ◯ 専門学校
- ◯ 大学
- ◯ 大学院
- ◯ その他の学校
- ◯ Not to say (回答不可）

* 5. あなたの主な職業はこの中のどれにあたりますか？

- ◯ 自営業（農林漁業、商工サービス業）
- ◯ 自営業（開業医、弁護士など専門サービス業経営、芸術家、茶道・華道の師匠など）
- ◯ 家族従業者（自分の家族が経営する事業を手伝っているもの）
- ◯ 会社役員
- ◯ 会社員
- ◯ 公務員
- ◯ 教員（小学校、中学校、高校、高専、塾など）
- ◯ 大学{教職）
- ◯ パートタイムやアルバイト
- ◯ 学生（中学生）
- ◯ 学生（高校生）
- ◯ 学生（短大・高専・専門学校）
- ◯ 学生{大学生）
- ◯ 学生{大学院生）
- ◯ 専業主婦
- ◯ 無職
- ◯ その他 (具体的に)

6. Ｑ５で「無職」とお答えの方で、以前は職業についていらした方は該当するものをお知らせください。

- ◯ 自営業{農林漁業、商工サービス業）
- ◯ 自営業(開業医、弁護士など専門サービス経営等、芸術家、華道茶道などの指導者など）
- ◯ 家族従業者
- ◯ 会社役員
- ◯ 会社員
- ◯ その他 (具体的に)
- ◯ 公務員
- ◯ 教員（小学校、中学校、高校、高専、塾など）
- ◯ 大学教員
- ◯ パートタイムやアルバイト

* 7. あなたのご家族の世帯収入（税込み）はおおよそどれくらいですか？{お差支えなければお知らせください）

- ◯ 200万円以下
- ◯ 200～400万円未満
- ◯ 400～600万円未満
- ◯ 600～1,000万円未満
- ◯ 1,000～1,400万円未満
- ◯ 1,400万円以上
- ◯ Not to say （回答不可）

* 8. あなたは日本コントラクトブリッジ連盟（以降JCBL）の会員ですか？

- ◯ はい
- ◯ いいえ
- ◯ いいえ、しかし以前は会員でした。

* 9. あなたのマスターポイントを教えてください。

- ◯ 0～50点未満
- ◯ 50～300点未満
- ◯ 300～500点未満
- ◯ 500～1,000点未満
- ◯ 1,000～3,000点未満
- ◯ 3,000～5,000点未満
- ◯ 5,000～10,000点未満
- ◯ 10,000点以上

* 10. ブリッジを始めた、習い始めた年齢を教えてください。

11. ブリッジをやめているまとまった時期があった場合はその期間（合計月数）を教えてください。

12. 一旦ブリッジをやめている時期があった方は、その理由を教えてください。

- ☐ 仕事が忙しかった
- ☐ 家事・育児が忙しかった
- ☐ 介護・看病が忙しかった
- ☐ 体調を崩していた
- ☐ その他 (具体的に)
- ☐ ブリッジのできない環境(クラブのない場所、海外など）にいた
- ☐ 家族などの反対にあった
- ☐ 興味・やる気を失っていた

* 13. ブリッジを始めたきっかけを教えてください　（複数回答可）

- [ ] 家族がしていたから（家族のすすめ）
- [ ] 友人、知人のすすめ
- [ ] 個人的に興味をもったから
- [ ] その他 (具体的に)

* 14. ブリッジを覚える、始めた方法を教えてください（複数回答可）

- [ ] ブリッジ関連の本
- [ ] ブリッジ関係のインターネットサイト、ネットブリッジ
- [ ] 体験教室、ブリッジクラブやカルチャーセンターのブリッジ教室など
- [ ] その他 (具体的に)
- [ ] 学校のクラブ活動
- [ ] 企業・官庁など所属組織のクラブ・余暇活動
- [ ] 駐在先での余暇活動

* 15. ブリッジの良い(好きな、楽しい）ところ、モチベーションが上がるポイントは何でしょうか？　(複数回答可)

- [ ] ゲーム自体の面白さ
- [ ] 競争性
- [ ] ゲームの難しさや自分の能力への挑戦
- [ ] 自分の努力が結果として出るところ
- [ ] ＪＣＢＬ発行のマスターポイント（ブラック＆レッド）の取得
- [ ] その他 (具体的に)
- [ ] パートナーやチームメイトと成功や失敗をシェアできること
- [ ] あらたな交友関係、社会性
- [ ] 自分の居場所を感じる
- [ ] ちょっとした特別（グレード）感　(例　ブリッジは高尚な趣味）

16. Q15で「ゲーム自体の面白さ」と回答された方にお尋ねします。ブリッジのゲームとしての面白い点はどういうところですか？

* 17. ブリッジの嫌いな、苦手なところを教えてください　(複数回答可)

- [ ] 上達が難しい
- [ ] 失敗した時の憂鬱感　（自身にがっかり、仲間に申し訳ない　など）
- [ ] 自分1人だけの力で成績が決まらない
- [ ] パートナーやチームメイトとの人間関係
- [ ] 対戦相手やクラブの雰囲気
- [ ] パートナー、チームメイト探しが面倒である
- [ ] 日程調整が面倒くさい
- [ ] 夢中になってほかのことができない
- [ ] 運動不足になった
- [ ] その他 (具体的に)

* 18. 日頃どのような形でブリッジをしていますか？（複数回答可）

- [ ] ブリッジクラブのサロン
- [ ] ブリッジクラブのウィークリーやローカルゲーム
- [ ] 競技会（セクショナル、リジョナル、ナショナル）
- [ ] クラブ活動、企業のクラブ・余暇活動
- [ ] 任意のブリッジサークル
- [ ] 講習会、レッスン（受講者として）
- [ ] 講習会、レッスン（提供者として）
- [ ] その他 (具体的に)

19. Q18で、講習会、レッスン受講とお答えの方は、内容を教えてください。(複数回答可)

- [ ] 講習会　（テーマや期間のきまっているもの）
- [ ] グループレッスン
- [ ] プロによる個人レッスン
- [ ] その他 (具体的に)

20. Q18でウィークリーやローカルゲームに参加とお答えの方にお尋ねします。頻度は平均で月に何回くらいですか？

- ○ 月に4回以下
- ○ 月に5～8回以下
- ○ 月に9～12回以下
- ○ 月に13回以上

21. Q18でセクショナル以上の競技会に参加と回答された方への質問です。平均月に何セッション（複数日にかかる試合含めて）参加されていますか？（通常１日２セッションです）

- ◯ 1～4セッション（月2日）以下
- ◯ 5～8セッション（月4日）以下
- ◯ 9～12セッション（月6日）以下
- ◯ 13～16セッション（月8日）以下
- ◯ それ以上

22. あなたはどのような競技会に興味がありますか？（複数回答可）

- ☐ ナショナル、リジョナルのオープンの試合
- ☐ ナショナル、リジョナルのフライト分けされた試合
- ☐ セクショナルのオープンの試合
- ☐ セクショナルのフライト分け、点数制限を設けた試合
- ☐ その他 (具体的に)
- ☐ 日本リーグ、クラブリーグ
- ☐ ＩＭＰ
- ☐ ローカル、ウィークリー

23. あなたはチーム戦、ペア戦の好みがありますか？

- ◯ チーム戦しか出ない
- ◯ チーム戦の方が好きだが、ペア戦にもでる
- ◯ ペア戦しか出ない
- ◯ ペア戦の方が好きだが、チーム戦にも出る
- ◯ 特に好みはない

24. どのような競技会があったら、もっと参加したいと思いますか？（自由に記入ください）

* 25. あなたには決まったパートナー（年に複数回プレイする人）がいらっしゃいますか？

- ◯ はい
- ◯ いいえ

26. Q25で「はい」とお答えの方。何人「パートナー」と呼べる方をお持ちですか？（プロの方はクライアント、生徒以外でお答えください）

- ◯ 1人
- ◯ 2～5人
- ◯ 6～10人
- ◯ 11～15人
- ◯ 16人～20人
- ◯ 21人以上

* 27. あなたがより頻繁にブリッジクラブに通いたくなるために、クラブに期待する大切なポイントを教えてください。（複数回答可）

- [ ] スタッフの資質、対応 （柔軟性、接客態度、運営の的確性や迅速性など）
- [ ] 会場の環境（快適性、清潔さ、バリアフリー）
- [ ] 会場の利便性・アクセスの良さ（駅から近い、電車バスなどの交通機関の数など）
- [ ] 会場周辺に商業施設がある{買い物をして帰れる）
- [ ] 提供するゲームの面白さ
- [ ] 参加者の人数　（十分な数の参加者がいる）
- [ ] 参加者の人柄　（感じの悪い人がいない）
- [ ] その他 (ブリッジクラブへの要望を具体的に)

* 28. インターネット（BBO、OKBridge, FunBridgeなど）でブリッジをしたことがありますか？

- ○ はい
- ○ いいえ

29. Q28で「はい」とお答えの方にお尋ねします。ブリッジをする機会として、日常的にネットブリッジを利用されていますか？

- ○ いいえ
- ○ 週平均1～3時間{未満）プレイしている
- ○ 週平均3～7時間（未満）プレイしている
- ○ その他 (具体的に)
- ○ 週平均7～14時間{未満）プレイしている
- ○ 週平均14時間以上プレイしている

30. ネットブリッジの良いと思う点を教えてください。（複数回答可）

- [ ] 利便性（いつでも、どこでも、どれだけの時間でもできる）
- [ ] 出かける手間が省ける（天候を気にしたり、着替えたり、お化粧したりしなくてもよい　など）
- [ ] 他のことをしながらできる
- [ ] パートナー探しをしなくてもよい
- [ ] その他 (具体的に)
- [ ] パートナーやチームメイトと練習ができる
- [ ] 住んでいる場所や国籍など関係なく、色々な人とブリッジができる
- [ ] お金がかからない

31. ネットブリッジの悪いところ、マイナス面と感じることを教えてください（自由記入）

32. インターネットでブリッジをされるようになって、「生ブリッジ」（普通の対面式ブリッジ）をする回数に影響がありましたか？

- ◯ はい。
- ◯ いいえ。（影響なし）

33. Q32で「はい」とお答えの方。その変化に一番当てはまるものを教えてください。

- ◯ 生ブリッジの回数(時間）が1～10％増えた
- ◯ 生ブリッジの回数(時間）が11%以上増えた
- ◯ 生ブリッジの回数（時間）が1～10％減った
- ◯ 生ブリッジの回数（時間）が11％～20％減った
- ◯ 生ブリッジの回数（時間）が21％以上減った
- ◯ その他 (具体的に)

* 34. あなたの月平均のブリッジ関連支出を教えてください。（エントリーフィー、レッスン・講習会費用、交通費、食費、交際費など）

- ◯ 1万円未満
- ◯ 1～2万円未満
- ◯ 2～3万円未満
- ◯ 3～5万円未満
- ◯ 5万円以上
- ◯ その他 (具体的に)

* 35. ブリッジと健康についてお伺いします。ブリッジを続けるために、健康に気を遣うことがありますか？

- ◯ はい。
- ◯ いいえ。

36. Q35で「はい」とお答えの方にお尋ねします。具体的にどのようなことをされていますか？気遣いされていますか？

* 37. ブリッジは、健康寿命をのばすためのボケ防止、認知症の遅延に役立つと思いますか？（なっていると意識されることはありますか？）

- ◯ はい
- ◯ いいえ
- ◯ わからない
- ◯ その他 (具体的に)

* 38. ブリッジをすることが元気の源になったり、日々の生活の楽しみになっていますか？

- ○ はい
- ○ いいえ
- ○ わからない
- ○ その他 (具体的に)

* 39. 何歳までブリッジ（クラブやサロンで）をされたいと思いますか？

- ○ 身体の続く限り（健康寿命のある限り）
- ○ ８０代以上！
- ○ ７０代までは！
- ○ その他 (具体的に)

40. ブリッジ以外に趣味がおありでしたら教えてください。

- ☐ 囲碁、将棋などのボードゲーム
- ☐ コンピュータ、インターネットゲーム
- ☐ eスポーツ
- ☐ その他 (スポーツ各種、芸術、旅行など具体的に)

* 41. ブリッジはあなたにとって何番目に大切な、或いは夢中になっている趣味ですか？

* 42. ブリッジと普及について。あなたは周りの人にブリッジを勧めたい（覚えてほしい）ですか？ (あなたが教える労をとる必要はありません)

- ○ はい。
- ○ いいえ。
- ○ わからない。

43. Q42で「はい」とお答えの方にお尋ねします。それは誰ですか？(複数回答可)

- [ ] 配偶者
- [ ] 父親
- [ ] 母親
- [ ] 子供（18歳、大学生未満）
- [ ] 子供（18歳、大学生以上）
- [ ] 孫（18歳、大学生未満）
- [ ] 孫（18歳、大学生以上）
- [ ] 友人、知人、同僚
- [ ] その他 (具体的に)

44. Q42で「いいえ」とお答えの方にお尋ねします。それはなぜですか？

* 45. あなたはブリッジの普及につながる活動をされていますか？

- ○ はい。
- ○ いいえ。

46. Q45で「はい」とお答えの方。具体的にどのようなことをされていますか？

* 47. 日本にはＪＣＢＬが認定したプロ制度、指導員資格がありません。このようなものは必要と思いますか？

- ○ 認定プロ制度は必要
- ○ 認定指導員資格は必要
- ○ どちらも必要
- ○ どちらも不要
- ○ わからない
- ○ その他 (具体的に)

* 48. 若年層のブリッジプレーヤーが少ないことをどのようにとらえていらっしゃいますか？

- ○ 憂慮すべきことであり、何か取り組みが必要である。
- ○ 仕方がない
- ○ 気にしない、どうでもよい
- ○ その他 (具体的に)

49. ブリッジの普及はどのような人を対象に注力されるべきだと思いますか？　（２つまで回答可能）

- [ ] 小学生
- [ ] 中高生
- [ ] 大学生・大学院生
- [ ] 社会人（パート従業者含む）
- [ ] 専業主婦
- [ ] 退職者(シニア世代)
- [ ] その他 (具体的に)

50. 日本のブリッジ普及に一番弊害となっているのはどういう点だと思いますか？

51. ブリッジが今後も活発に存在し続けるために、JCBLほか関係者にどのような努力、施策が必要と思われますか？

52. 日頃、ブリッジについて思っていること、感じていることがありましたら自由にお書きください。

53. このアンケート調査の結果に興味がありますか？

- ○ はい
- ○ いいえ

54. ＜ラストです＞　ここまでご回答、本当にありがとうございました。

この試みに興味をお持ちくださり、追加アンケート、ヒアリング（秘密厳守）などにご協力いただける場合は、お名前とメールアドレスをお知らせください。　或いは、アンケートの回答内容とリンクしないように、直接 akiko.yanagisawa@ruri.waseda.jp まで「協力ＯＫ」のタイトルでメールをいただければ幸いです。